広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

中学校における新しい国際交流プログラムの開発

― Exploris Middle School・Odyssay Schoolとの交流を通して ―

神原　一之　　鹿江　宏明　　中本美奈子　　山崎　学肖
朝倉　　淳　　神山　貴弥

１．はじめに

本校では，2001年アメリカのノースカロライナ州にあるExploris Middle School（以下Exploris）と姉妹校提携を結び，国際交流を始めた。2003年本校生徒７名が渡米し，2004年にはExploris生徒７名が来日し，本格的な相互交流を始まり，2005年には，生徒間に共通のテーマを設定して総合的な学習の時間を利用して活動内容や研究成果を発表するに至った。以来，テーマを変えながら第３学年を中心に交流を継続している。その取り組みについては，2006年第２回学校間交流国際フォーラムにて詳しく報告している。

また，昨年アメリカのカリフォルニア州にあるOdyssay School（以下Odyssay）と総合的な学習の一つとして一日のみであるが交流を行い，本年度以降も交流を継続していくことが確認できている。

同じアメリカの学校であるが，姉妹校提携の有無，日本語の履修の有無，交流における地域社会の参画の有無など異なる点が多く見られる。

両校との交流を比較しながら，異文化・異文明を理解し共存していく力をつけるためにどのような国際交流プログラムを実施することができるのか実証的に考察することが本研究の目的である。

そこで本稿では本研究の１年次として，Explorisとの交流実践とOdyssayとの交流実践を検討し，その課題と発展の可能性を探り，来年度以降の国際交流プログラムの指針を明らかにしたい。

２．国際交流の指導のポイント

交流に先立ち，生徒が抱く国際人のイメージを把握し，国際交流における課題は何か探るためにOdyssayと交流を希望した本校３年生10名とOdyssayの生徒12名に対して，国際交流に関する質問紙を配布し，５件法（１全くそう思わない～５とてもそう思う）で意識調査を５月に行った。なお本校の10名の生徒は，国際交流を希望した生徒であるので生徒の中でも交流に対して比較的意識が高い生徒と思われる。

双方の生徒に「あなたが思う国際人とはどのような人だと思うか」10個の項目についてそれぞれの意識をたずねた結果が表１である。数値は，全くそう思わない～とてもそう思うまでを１点～５点に対応させた平均値である。

母国語が英語でない東雲（日本）の中学生にとって，国際言語である「英語を話すことができることが国際人である」「外国人と積極的に話すことができる」「言葉の違いを気にせずつきあうことができる」など言語，会話に関する思いが強い。一方，Odyssayの生徒たちは，アンケート項目のほとんどの項目について東雲中の生徒よりも低い傾向にある。しかしながら，「自国の文化や考え方をよく知っている」については，わずかではあるが東雲の生徒より高いポイントであった。Odyssayの生徒は，会話することそのものよりも，「自国の文化や考え方をよく知っていること」が国際人であるというイメージを持っていることがわかる。

また，双方の生徒共に国際人を「言語の違いを気にせずつきあうことができる人」というイメージを強く持っている。人と人の付き合いができないのでは国際人と言えないと思っている生徒が多い。

次に，図１は「外国の人と話すとき，大切なことは何か」を東雲中の生徒にたずねた結果である。

聞き方，話し方に重点が置かれ，話の内容はさほど重要ではないと思われていないことがわかる。

以上のアンケート結果から，これからの国際交流のあり方として，生徒には外国語を話す外見のかっこよさではなく，自国の文化や考え方，国際社会における日本の役割などを知り，その上で自分の考えや思いをしっかり伝えられるようにしたい。そのために中学生

Kazuyuki Kambara, Hiroaki Kanoe, Minako Nakamoto, Michinori Yamasaki, Atsushi Asakura, Takaya Kohyama, Developing for New International Exchange Study―Through Exchange Program about Exploris Middle School and Odyssay School―

の段階では，学習した英語を実際の場面で活用できるようにすることとその際に他文化の人たちへ伝えたい「こと」や「もの」をもたせる指導が重要であると考える。

表１　国際人に対する両校の生徒のイメージ

質問項目	東雲	Odyssay
英語を話すことができる	4.2	3.3
いつでも外国人と積極的に話すことができる	4.3	3.8
外国に多くの友達がいる	3.9	3.8
自分の意見をしっかりと主張することができる	4.1	3.8
世界中を移動して仕事をしている	4.1	3.8
外国人と日常的にメールのやりとりをしている	4.0	3.4
外国の文化や考え方をよく知っている	3.9	3.8
自国の文化や考え方をよく知っている	3.8	3.9
言葉の違いを気にせずにつきあうことができる	4.4	4.2

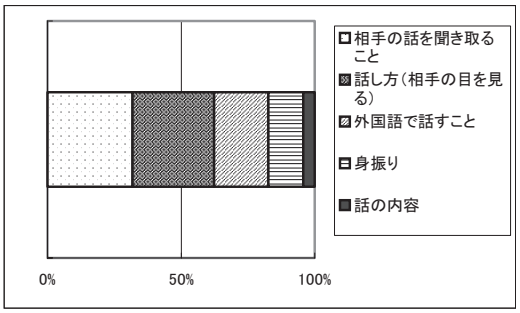

図１　外国の人と話すとき大切なこと

３．国際交流の実際

前節で示したような国際交流の考え方のもと，５月に宮島でOdyssayと文化交流[※1]，その後10月以降E-mailによる交流，８月にExplorisへの訪米交流を行った。以下にそれぞれの交流の実際を報告する。

（１）Odyssayとの宮島における交流

１）実施日

平成20年５月17日

２）実施場所

宮島大聖院と周辺

３）交流のねらい

広島の歴史や文化を海外の中学生に伝えるとともに，アメリカの中学生からみた広島について知る。

４）交流のプログラム

９：00　宮島口集合
10：00　大聖院（アクティビティ１：箸づくり）
12：00　昼食（アクティビティ２：手巻き寿司）
13：00　山田屋（アクティビティ３：もみじまんじゅうづくり）
16：30　サヨナラセレモニー（歌のプレゼント）

５）交流の実際

①「東雲とOdyssayの今後の交流」をテーマにしたブレーンストーミング＆プレゼンテーション

本校生徒12名とOdyssayの生徒12名の中で４つのグループに分け，両校の「今後の交流」をテーマに，それぞれのグループでブレーンストーミングをした。自己紹介から始まり，スポーツや映画などの共通の話題を通して徐々に親交を深め，模造紙上での日本語や英単語のやりとりから，ディスカッションが活発になった。Odyssayの生徒はひらがな・カタカナを書くことができ，簡単な日常会話は聞き取り，話すことができるほど日本語力は高い。東雲の生徒は，その学力の高さに驚きつつも，電子辞書を活用したり，教員に支援してもらったりしながらコミュニケーションを図った。その後，グループ毎に日本語と英語でプレゼンテーションを行った。

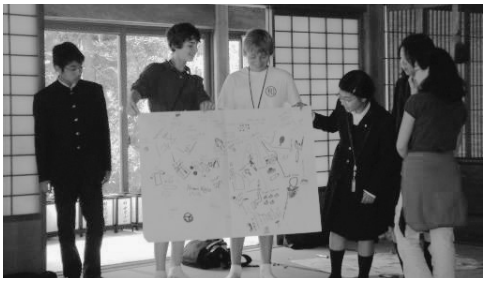

写真１　ブレーンストーミング後のプレゼンテーションの様子

②お箸と箸袋作り

宮島てらこや[※2]の小学生や幼児達と合流し，グループに分かれ，竹を使った箸作りをおこなった。東雲・Odyssay共に初めて体験する生徒が多い中，慣れて要領を得てくると，お互いに教え合ったり褒め合ったりしている場面が見受けられた。

③昼食：手巻き寿司

作った箸を用い，各自好みの手巻き寿司を作り，和やかな雰囲気の中，昼食会をもった。手巻き寿司の具材について好みを聞いたりするなどの会話をしていた。

④もみじまんじゅうづくり

山田屋にて，宮島てらこや，東雲，Odyssayの各グループからでたアイデアを基に，オリジナルのもみじまんじゅうを作った。各グループはプレゼンテーションし，コンテストをおこなった。審査中の時間を利用し，東雲の１グループは総合的な学習で必要なアンケート調査をOdyssayの生徒達におこない，また，Odyssayの生徒達も修学旅行の一環のアンケート調査を会場内の人を対象におこない，有意義に過ごすことができた。表彰のあと，Odyssayの生徒がお礼を兼ね，日本のポップスを全て日本語で歌い，大きな拍手を誘った。

⑤サヨナラセレモニー

場所を海岸へ写し，サヨナラセレモニーをおこなった。東雲から歌のプレゼントとして，練習中の合唱課題曲を歌った。その後は学校のオリジナルグッズを渡し，最後まで別れを惜しんだ。

写真２　サヨナラセレモニーの様子

６）宮島での交流を終えて

事前の様子では，本校の生徒達は大変楽しみにしていた様子が伺えたが，実際に交流してみると，会話や積極的に関わることに躊躇していた生徒が少なからずいた。そのことは図２の事前事後のアンケート結果からも明らかである。

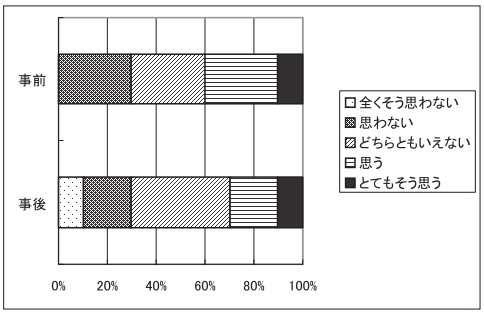

図２　外国の人と友達になることの容易さ

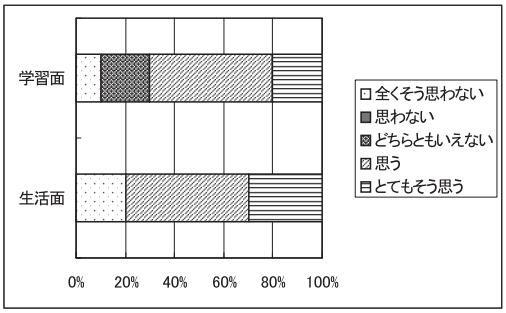

図３　Odyssayとの交流を通しての効果

肯定的な意見が減っていることや交流の様子から，語学の壁や，お互いを理解するには今回の活動時間が少ないことが理由として挙げられる。しかし，図３のように７～８割の生徒がOdyssayとの交流に効果があったという肯定的な意見を持っている。この時期に同年代の外国の友と関わり，触れあうことは，大きな意義があると言えよう。

（２）OdyssayとのE-mailによる交流

１）実施期間

平成20年10月15日～現在

２）場所

各家庭

３）交流のねらい

・日常的な交流を継続することによって，互いの文化を理解する。

・５月に実施する交流会の計画，準備を行う。

４）交流生徒の選定（18名）

第２学年生徒全員に交流の趣旨を説明した後，交流希望者18名（男子２名，女子16名）全員を交流対象者とした。Odyssayから送られてきたプロフィール（趣味, 家族, 性別など）を参考にして交流相手を決めた。相手が12名であるため，２対１の交流をする生徒が６名いることになった。

５）交流の内容

①交流のルール

Odyssayとの間で以下のような取り決めをした。そして保護者に対しても趣旨と留意点について，同様に説明を行った。

１．メールもビデオレターも必ず，ccに神原○○@hiroshima-u.ac.jpと今瀬（オデッセイスクールの先生）●●@YAHOO.CO.JPを入れてください。
２．メールは日本語と英語の両方で書いてください。英語の文と日本語の文の内容が異なっても問題ありません。もちろん, 日本語が英訳になっていても良いです。日本語は必ず「ですます調」でお願いします。助詞もなるべくつけてください。
３．当然のことですが，相手のアドレスや神原先生や今瀬先生のアドレスは個人情報ですので，この情報を他の生徒に知らせることはやめてください。

②交流の現状

第１回目のメールを送信する際には，プロフィールを英語と日本語の両方で話させて，ビデオで録画したものを添付した。２回目以降は，それぞれの興味や関心に応じて自由に進めさせた。

写真やビデオで顔を確認することがメール交流の意欲を向上させると考えた。実際に生徒は相手の写真を見て興味を広げたり，Odyssayからも東雲の生徒の英語スピーチに驚いていると伝えられた。導入としては効果があったと思われるが，交流を持続していくためのエネルギーとしては十分ではなかった。

図４，図５は交流生徒のメール交流の頻度（横軸：

人数）と交流の満足度（横軸：人数）を示している。

ほぼ毎日交流できているペアが２組あるが，大半は月１回未満の交流である。双方とも交流の頻度が低いことが原因で，不満・やや不満・どちらでもないと応えている生徒が半数以上いる。例えばOdyssayでは「漢字の使用はやめてください」「翻訳ソフトを使わないで，意味がわからない」，東雲では「日本語も使ってください」「わからないときは日本語を使わないで」というような要求が上がっている。

満足と応えている東雲の生徒は，「お互いのことをよく知ることができる」「英語でたくさん会話ができる」「相手のメールが理解できるから」「日本のことを相手がよく知っている」などの理由からもわかるように相手が言いたいことを受け止めることができている比較的英語の基礎学力が高い生徒たちである。

このように双方の生徒共に，交流をもっと活発にしたいという意思はあるが，言語使用の不十分さが妨げとなっている。

しかし，中学２年生でも可能な簡単な質問をお互いに出し合うことで，メールのやりとりが頻繁に行われているペアもある。はじめから日本人同士のメールのやりとりを求めるのではなく，「相手のことを知りたい」という気持ちをもたせることが重要である。表２は交流の一例である。

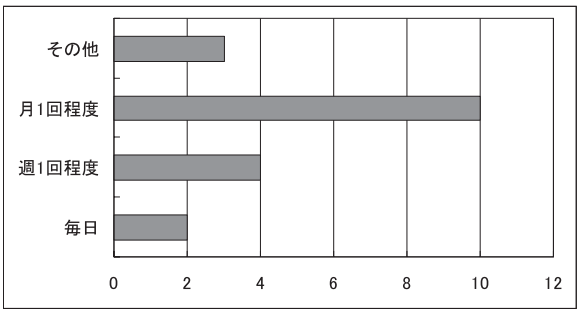

図４　交流の頻度

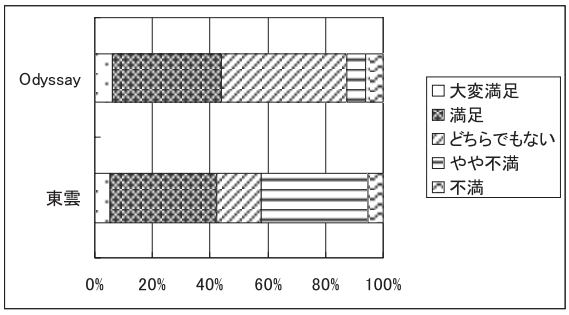

図５　交流の満足度

表２　E-mailでの交流の一例

次に実際のやりとりの一例を示す。生徒の名前は仮名である。

10月23日
好きなサッカーのチームはありません。
I like history. I don't read a book now.
私はEnglishのほかに語学はまなんでいません
Brianneはたくさんのことばを学んでいてすごいですね!!
「はなこさん」と,「さん」をつけなくていです。「はなこ」とよんでください！

10月24日
はなこへ
ありあとう。
You are good at English. English is a hard language.
Do you have a favorite type of history.
好きなサッカーのチームはありません。I don’t wat much soccer.
がっこうで，なにをべんきょうしますか。
わたしは日本語のけいようしいをべんきょうます。またね。
ブリアーンより

10月24日
Dear Brianne
「ありあとう」はちがいます。
「ありがとう」です。
「ありがとう」はとてもすてきなことばだとおもいます。
I study Japanese, English, math, geography, history, cience, Art, Physical education, music, home economics, technology at school.
わたしの名前のかんじをおしえます。
「花子」です。ぜひ，かけるようになってください♪

（３）Explorisへの訪問交流

今回の訪問交流では，これまでのプログラムのように各自が「研究テーマ」を決め，課題意識をもってExploris校を訪問し交流を深めることに加え，本研究の中核となる「英語をリアルな場面で活用する」ことと，「伝えたい確かな内容をもたせる」ことの２点を重点的に取り組むために，生徒自身による「授業実習」を立案しExploris校で実施した。

以下にそれぞれの交流の実際を報告する。

１）授業実施日
平成20年８月19日，22日

２）実施場所
Exploris校７学年，８学年教室

３）交流のねらい

日本の文化を米国の生徒に伝える授業実習を通して，日本の文化を再認識するとともに，米国生徒との積極的なコミュニケーションを図る。

４）交流のプログラム

・事前の取り組みとして，訪米前に５回ミーティングを重ね，授業実習の内容として「剣玉・切り絵」「折り紙・おはじき」「習字」「浴衣体験」とした。また，担当生徒を決定するとともに，教材研究と授業内容の検討を行った。

・授業にあたっては，１単位時間につき米国生徒一学年（２クラス約60名）を対象とし，事前に４グループを編成した。また，受講方法はローテーションによる全講座受講方式とした。なお，実践した学年は第７学年と第８学年である。

・１グループあたりの授業時間を20分とし，１単位時間（90分）内で計４回の授業を行った。なお，「剣玉・切り絵」と「折り紙・おはじき」については，グループをさらに二分し，約10分の交代制とした。

５）交流の実際

渡米前に必要物品を準備し，航空便にてすべて郵送していたため，持ち物が不足するようなトラブルは生じなかった。また，ほぼ全員の生徒が，初めて「指導者」として英語で授業を行ったが，説明についてはどの生徒も簡単な英単語と身振り・手振りを用い，積極的にコミュニケーションを図ることができていた。

グループごとの状況を，以下に報告する。

＜剣玉・切り絵＞

剣玉については，演示をすれば視覚的に活動が伝わりやすいため，スムーズに授業が進んだ。100円ショップで購入した剣玉を使用したが，糸が外れるトラブルが相次ぎ，修理に追われる場面もあった。

切り絵については説明が必要な場面が多く，また，米国の生徒は，はさみを扱うことに慣れていないため，相手の様子を見て指導をしたり，演示をしたりするなどの工夫で対応した。

写真3　切り絵を体験している様子

＜折り紙・おはじき＞

折り紙は米国でも有名だが，説明をするときには，かなり英語を使わなければならず，英語力が問われた。教材は「ぱたぱた鶴」だが，米国の生徒によっては，手先の作業に慣れないために上手に折ることができず，できあがりに個人差が生じる授業となった。

おはじきは，比較的ルールが米国生徒に簡単に伝わったため，時間内を楽しく遊ぶことができていた。

写真４　おはじきに熱中する生徒たち

＜習字＞

筆で「和」を教え，半紙に書かせるとともに，持参したうちわに寄せ書きのように書き入れる授業を行った。墨を扱うために，授業前は汚れることが気になっていたが，実際に授業が始まると，大きなトラブルもなく落ち着いて取り組むことができていた。米国の生徒は漢字に対する興味・関心が高く，全員熱心に練習し満足していた。なお，墨は墨汁を用い，硯は持参したプラスチックトレイで代用した。

写真５　名前の記入を指導している場面

＜浴衣体験＞

日本から10着程度，浴衣を送って使用したが，生徒たちは着用すると，記念写真を撮影するなど，楽しく体験をしていた。今回の授業は各グループ20分の設定であったが，このグループが最も時間がかかっていたため，教員がサポートに入るなどで対応した。

写真６　浴衣で記念写真

６）成果と課題

今回の授業実習の設定は，コミュニケーションの目的が明確であるため，生徒は交流がやりやすかったと

答えている。また，渡米前から準備と練習を重ねていたこともあり，どの生徒も達成感を得ていた。必要な物品を事前に送付しておいたことも，成功した要因の一つと考える。

この授業実習を通して，生徒は自分の所属学級の生徒と一層豊かな人間関係を構築できていた。訪問する生徒にとっては大変な取り組みであるが，成果を考えると，継続したい学習プログラムであると考える。

課題としては，渡米前の準備を早期に開始していなかったために，事前学習がやや不足し，授業で説明に窮することがあった。また，準備物を送付する際，かなりの金額がかかった。早期にプランを確定し，教材研究を充実させるとともに，準備物は船便で郵送するなどの工夫が必要であると考える。

４．おわりに

本研究では，Exploris及びOdyssayとの交流実践を通して，中学校における新しい国際交流プログラムの指針を示そうとした。

英語を学び始めて間もない中学生にとって，国際交流において最も障壁になると思われていることが語学力の問題であり，生徒自身もそのことに不安を感じている。本研究においても，生徒が言語を使いこなせる人が国際人であるというイメージをもっていることが明らかになったが，国際交流の指導のポイントは，言語を使いこなせるようにすることではない。自国の文化や考え方，国際社会における日本の役割などを知り，その上で自分の考えや思いをしっかり伝えられるようにすることが指導のポイントであることを，本研究では最初に指摘した。

実際，Explorisとの交流では，「英語をリアルな場面で活用する」ことと，「伝えたい確かな内容をもたせる」ことを重点において授業実習を行わせた結果，生徒は現地の生徒と積極的なかかわりを持つことができ，達成感を得ることができた。また，Odyssayとの宮島における交流でも，今後の交流をテーマとした話し合いや，箸やもみじまんじゅうづくりといった何をすべきか目的が明確な活動では，語学力にかかわらず相互交流が活発に行われた。一方，OdyssayとのE-mailによる交流では，語学力がある一部の生徒は活発な交流を行ったが，そうでない生徒の交流は不調であった。これは結果として，この交流が生徒自身に任されていたために，伝える内容が定められないまま交流の機会だけを得た状況になったためと考えられる。

本節の最初でも述べたように，英語を学び始めて間もない中学生にとって国際交流においての最大の不安は語学力であり，指導・支援する側の教師も，言語によって意志疎通が図れることに腐心しがちである。しかし，本研究の結果が示すように，語学力が十分でない中学生であるからこそ尚更，国際交流の場面では，伝えたい内容を明確にしてやる指導・支援が重要であることがわかる。もちろん語学力が全くなければ意思疎通が難しいこともあろうし，決して語学力が必要ないとは言わない。しかし，人は伝えたいことがあれば必ずしも言語に頼らずともありとあらゆる媒体を通して意思疎通を図り，そのことが結果として，語学への学習意欲を高めたり，他国や自国の文化に対する理解を深めたり，またグローバル・マインドの醸成につながる。本年度，課題が残った交流では，次年度以降，この点を特に強化して取り組み，中学校における新しい国際交流プログラムの開発につなげていきたい。

※１　Odyssayとの宮島での交流は，本校総合的な学習のコーディネーターとして関わっている池本よ志子氏の仲介で2007年より始めた。

※２「宮島てらこや（会長　上田宗岡　事務局（株）ディアフォロン）」は，子どもたちと本気で向かい合い世界遺産の宮島をメインフィールドに，日本・広島・宮島の自然や伝統文化を共に学び体験し，「大人が育つ，子どもが育つ地域づくり」を目指しているものである。

参考文献

神原一之.「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した総合的な学習の時間の実践．日本生活科・総合的学習教育学会大14回全国大会（広島大会）公開授業活動案・指導案集．2005．pp.58－63

小原友行．グローバル・パートナーシップを推進するための人材育成およびプログラム開発―広島大学グローバル・パートナーシップ・スクールセンター設立に向けて―（2007－2008）米日財団奨学寄付金事業成果報告書．2008.